

ロックフェスのもつ本質的意義の検討

氏名 山下 紘生

要旨本文：本研究では、日本のロックフェスのもつ、元来の本質的意義と目的、地域や社会に与える影響を調査した。現在、地域貢献や地域活性化にフェスが用いられる事象が増えている中で、ロックフェスはこういった目的から始められたのか。歴史的背景を基に、今現在のフェスをあらゆる観点から見ることで、将来的なフェスの在り方や理想、定義を明らかにし、ロックフェスのもつ可能性を見出すことを目的とした。

中央主体、地元主体、アーティスト主体それぞれの主体の代表ともいえる10個のフェスを対象に、ホームページやサイト、ブログに加え、実際に筆者がロックフェスに参加することで各フェスを客観的に調査し、評価した。その結果、3つの主体で規模感や目的の違いから課題点は異なるものの、地域貢献の難しさといった点において、地元住民の理解と協力、地域らしさの反映、持続的な価値の創出といった、3つの共通の課題が挙げられることがわかった。

そこで筆者は、理想的なロックフェスに求める項目として、インフラ面では地元を巡る動線管理、客層では地元以外の人集客と宿泊、協同では地元住民の協力と還元といった3つの項目を定義し、そこで2024年に開催された「ひなたフェス」を例に取り上げた。この「ひなたフェス」は、スポーツ以外の使用を禁止していたスタジアムを初めて利用したフェスであり、メンバー全員を観光大使に任命、市町村ごとのポスターを作成することで、広範囲の観光を実現した。このフェスでは、長期滞在や経済波及効果も高く、なにより地元住民との協力が顕著に見られるものであり、これはいわば、それぞれの主体ごとに不足している点を補うヒントになっていたともいえる。さらには、付加価値やSNSの重要性を説くものともなった。

音楽フェスによる地域活性化の成功には、地元住民の理解と協力、地域資源の活用、持続的に地域に価値をもたらす必要があり、これからのロックフェスは、自然と共生、地域の協力を第一に考えるものが増えると考えられる。やはり、大規模なロックフェスを開催するには、会場やスペースの確保、周辺住民の協力と自然への考慮は必要不可欠である。また、オンラインとの平行を続ける中で、SNSの活用と制限、罰則が必須であり、違法アップロードや転載の抑制のほか、人口の減少や働き手の不足、価格の高騰化などの社会問題を併せて考える必要がある。さらには、地域貢献や地域活性化といったあるべき方向性にのみならず、ミュージックツーリズムとしての新たな可能性と影響を国として広めることができれば、地域文化の周知の場としても活かすことができ、県外からの観光客も増えるため、持続的に地域に価値をもたらすことにも繋がる。最後に、多様化するフェスを、人、物を受け入れる姿勢が今我々に求められることであり、多様化する時代においても重要である。